

〔書 評〕

終末論を読む

平 岡 信 之

Nobuyuki Hiraoka

私は大学教員1年生である。それまではサラリーマンをやっていた。実は、この職について今一番有り難いと思ってるのが、真っ昼間から仕事と称して堂々と本を読んでもらえるということである。おかげでこの1年、書物を通じて結構幅広く情報収集ができた。特に、我々人類が今どういう状況にあるのか、について、これは前々から気になっていた事なのだが、いろんな事が分かってきた。と同時にその副作用として、私の中に危機感と問題意識が芽生えて来た所である。

その危機感を一人で抱え込むのは胃に悪い。できるだけ多くの方と共有したいものである。いや、私の身体とは関係なしに、そうする必要があるような気がする。しかし、ここでそれを説明するだけのスペースはないし、第一、ここは書評のページである。そこで、書評の変形として、文献紹介或は読書ガイドの形をとることにする。努力して厳選したが、なお皆さんにどうしても読んで貰いたい本が多数あり、また、ひとつまみの本を紹介してそれで事足りるほど状況は単純でもなさそうなので、言葉足らずのままに次々と書名を挙げて行くことをお許し頂きたい。すべての本について「読めば解かる」とだけコメントするより少しはましだと思って。

さて、世紀の変わり目が近づくにつれ、世間では終末論が取沙汰されるようになって来ている。例えば書店の棚のスペースが世間の関心のバロメータだとすると、資源・環境問題と、宗教・精神世界関係の書籍・雑誌が、パソコン入門やレジャーガイドといった大平楽なものに混じって、この2・3年ほどの間に増えているのが分かる。近い将来に、何かが起こるのだろうか。起こるとしたら、いったいそれは何なのか。

幸いにして、核戦争という最悪の事態の可能性

はとりあえず低くなりつつある。すると浮かび上がってくるシナリオの1つは、原発事故だろう。原発問題はエネルギー問題と常に背中合わせになっており、賛中否保の様々な立場からの書物が発行されている。ここでは、1冊だけを挙げておこう。

〔1〕 西岡孝彦『ぼくが、原発に反対する理由』
徳間書店

「百の説法屁一つ」という諺があるが、本書はその「屁」に相当するものである。著者は元原発設計技師であり、本書では彼の経験をもとに原発の設計現場がいかにいい加減なものかを生々しく描いている。分野は違うが私自身も元々技術畑の人間であり、このいい加減さについては（自慢できる話ではないのだが）うなずけるものがある。本書の性格上、客観的な記述では決してないため、原発論争の土俵に上がる資格のない書物だとも言えるが、実は原発問題を含めた昨今の問題は地球人全員が当事者であるのが特長で、真に客観的になるのはどのみち不可能なのである。少なくとも、見せかけの客観性に飾られた説法のいくつかを本書は吹っ飛ばしてくれる。

いずれにしても、神ならぬ人間の作るシステムに100%の完全性は望めない。そのため工学の世界では、フェールセーフやフールプルーフといった、安全性のための仕掛けを用意してはいるが、それらの仕掛けに起因する事故もまた過去に少なからず起きているのも事実なのである。危ない賭けはしたくないものである。

かといって、我々の文明的生活が依存している化石燃料の枯渇がそう遠くないことも確かである。では我々はエネルギーをどこから得ればいいのか。その答えは、いわゆるAT¹¹（適正技術と訳されることが多い）の中に見いだされる、かも知れない。

ここでは2冊の古典^{†2)}）を見てみよう。

[2] エイモリー・ロビンス『ソフト・エネルギー・パス』時事通信社 '79^{†3)}

は、最近の環境問題関係書の中では [5] [6] 等と並んで頻繁に引用される名著である。[3] でもそうだが、化石燃料とりわけ石油に過度に依存する現代社会に対する批判が出发点になっており、化石燃料を「後に悲惨な結果を招く、突如転がり込んだ富」と位置づけ、現代人をギャンブルで馬鹿当たりしてしまった人間に喩えている。^{†4)} 本書では、従来の中央集中型のエネルギー供給形態をハード・パス、それに対して、風力や太陽熱などの更新性(枯渇しない)のエネルギーに基く分散型の供給形態をソフト・パスと呼び、後者への移行を提案すると共に、資本コストや社会構造の点からその可能性を検討している。ハード・パスでは、例えば湯を沸かす、つまり数十度の温度差を得るという目的のために、発電所の中で数千度の焰やさらには数兆度の核反応を起こす、という無駄なことをやっているという訳である。

一方、

[3] G・ボイル『太陽とともに』社会思想社 '78

でも、同様の主張を行なっているが、[2] に比べて、より具体的な技術的提案と実施報告が行なわれているのが特徴である。本書では化石エネルギーを使う現代人をへロイン患者に喩えている。我々が一旦覚えてしまった文明生活をなかなかやめられないというのが1つの理由であるが、もう1つ、化石燃料(核燃料もだが)の偏在性による危険性も著者は指摘している。今後エネルギーが不足する事態になった時に、エネルギーを握った者

に権力の過大集中が起こる可能性があるからである。それは石油産出国かも知れないし、集中型発電施設を所有する大資本かも知れない。著者の表現は控えめではあるが、その時にはマフィアとへロイン中毒者の関係のようなものが地球規模で再現されてしまう、そういう可能性までが暗示されている。

さて、ソフト・エネルギー技術について、その後10余年の進展は、あまり妙々しいとはいえないようだが、それでもエネルギー問題に関しては少なくとも上記のように具体的な方向が示されているだけましと言えるだろう。それに比べてもっと厄介なのが環境問題である。例えば後出の [8] によると、化石燃料を使い切るよりも先に、その燃焼によって生じる二酸化炭素による影響の方が先に現われるだろうと言われている。その場合、地球規模での異変となる可能性は高い。どういう可能性があるか、その概要を知るためには、その名もずばり、

(4) 筏英之ほか『環境カタストロフィー』日刊工業新聞社 '90^{†5)}

などの本が役に立つだろう。が、ここではさらに深い理解を試みたい。まずは、

[5] J.E.ラブロック『地球生命圏』スワミ・ブレム・ブラブグ訳、工作舎 '84

だが、この書名を知らなくても、地球に対する「ガイア」という呼び名を知らない人はいないだろう。その名は、本書で提唱されている、地球は1つの生命体である、という「ガイア仮説」に由来する。地球上の大気・水などの状況が、非常に長期に渡って安定していることが、生命体の持つ「ホメオスタシス(恒常性)」の維持能力と同等の物を持っている証明である、というのがその主張である。ちなみに本書は、邦訳の刊行は遅れたが、本書の中核となるアイディアは72年に発表されており、また、後の研究に大きな影響を与えていることから、重要な古典であると言っていいだろう。

但し、本書を読むにあたっては以下の2点に注意する必要がある。1つは、環境カタストロフィーの生起可能性についての本書の見通しが楽観的すぎることである。[8] によると、ラブロック氏自身も後に見解を訂正しているらしい。しかしそのことが本書の価値を損ねるものでは決してない。

†1 ATの狙いはエネルギー問題に限定したものではないことに注意されたい。

†2 この分野では発行後10年を越えれば古典と呼んでしまってもいいだろう。

†3 以下、翻訳書については、原書名は省略し、発行年度も邦訳についてのみ記す。

†4 ここで引用したのは実は著者自身の言葉でなく、序言の中に記された言葉である。本書では他にもうまい喩えを多数引用している。

†5 書名を紹介するだけのものについては文献番号を [] でなく () で囲んで示す。

もう1つ、以後の文献から、本書が誤解を招きやすい引用のされかたをしている場合があることにも注意されたい。本書では地球の恒常性維持能力だけを問題にしており、その先の可能性（意識や知性の存在）についてはむしろ否定的である。

ついでにもう1冊読んでおこう。

[6] レイチェル・カーソン『沈黙の春』青葉築一訳、新潮社 '84

原書が62年、最初の邦訳は『生と死の妙薬』というタイトルで64年に出版されており、本書はその改題再版である。[5]と同様に、後の書物から数多く引用されており、その引用だけを見ると単に「DDTの危険性を告発した」^{†6)}だけの本のような印象を持ってしまいがちなのだが、読んでみると実はそうでないことがわかる。[5]では「生命圏(biosphere)」と呼んでマクロに扱っている、大気、水、土壌と生物の関係について、それがいかに精緻なメカニズムであるか、そして、それが人間の不適な営みによっていかに破壊されているかを細やかに描写した本なのである。

さきほどから古典ばかりを、それも発行年度に妙にこだわって紹介しているが、勿論それには理由がある。環境異変の起こるXデーが21世紀初頭であることを、環境予測の多くが示唆しているが、すると我々に残された時間は、これらの書物が世に出てからの20～30年の歳月よりも短いことになる訳だ。この間に人類がどれだけ「賢い」ことをしたか、を考えると、頭が痛くなる。日本でも、例えば、

(7) 有吉佐和子『複合汚染』新潮社 '75

がかつてベストセラーになったが、その後15年以上たった今でも、多くの人が汚染された餌を無邪気に食べているのである。^{†7)}

こういった問題を憂慮しているのは勿論私だけ

†6 その功績の歴史的意義ももっと高く評価されるべきなのだろうが、ここでは本の内容の方に焦点をあてる。

†7 こう書くと[6]の場合と同様に本書が食品汚染だけを扱った本のような誤解を受けてしまいそうだが、勿論そうではない。

†8 最近多くの企業がやっている、例えば再生紙を使うといった程度の、小手先或は見せかけのエコロジーでは勿論ない。

ではない。たとえばこの人もそうだ。

[8] ビル・マッキベン『自然の終焉』鈴木主税訳、河出書房新社'90

過去に、『〇〇の終焉』というタイトルの本が何冊か出版されている。いずれも高名な社会・経済学者の筆によるもので、時代の節目を的確に指摘した、影響力の強いものであったと言われている。本書のタイトルもそれに倣っているが、過去の「終焉」物と違っていることの1つは、本書のテーマが人間社会内部の営みでなく、外側（自然）との関係にあることである。人間だけが地球上で傲慢に生きる時代は終わった、ということなのだろう。もう1つの違いは、著者が若手の（元）ジャーナリストであるということだが、時代の節目を指摘するという点では、高名な学者の著作に引けをとらない、重要な意義を持つ書物だろう。

本書はほぼ一貫して悲観的な姿勢のもので、あたかも「自然」へのレクイエムのようなものである。但しこの書名は、地球上の動植物或は地球生命そのものといった自然の営みが死に絶えるという意味での「終焉」ではない。ではどういう意味か、その内容については、ここでは秘伝のマントラ「読めば解かる」で済ませておこう。著者は20代で一流誌のスタッフライターの地位を捨てて森の中に移り住み、いわゆるエコロジカルな^{†8)}生活を自ら模索・実践している人である。それだけに、彼の自然に対する思いは強く伝わってくる。実は私自身も遅ればせながらエコロジーの実践を目指している身であり、共感する所が大いにある。

というように書くと、本書が情緒的な本であるような印象を持たれてしまいそう（だから書評は難しい）なので、本書はむしろ科学的な論調で書かれている本であることも示しておこう。例えばシベリアの凍土の中に大量のメタンガスが閉じ込められているというデータについて言及している。地球の温暖化が進めばそれが大気に放出され、メタンガスも温室効果気体の一員であるから、それによって正のフィードバックループが形成され、結果として温暖化が加速される、というような説がそこから導かれるという訳である。

科学的というと、この本も忘れるわけにはいかない。少なくとも私は目から鱗が1枚落ちた。

[9] J・リフキン『エントロピーの法則』竹内

均訳、祥伝社 '82

熱力学の第1法則は別名エネルギー保存則と呼ばれ、ご存じのように電気・運動・位置・光・熱などの種々の形態のエネルギーの等価性を謳ったものである。この法則は数式によって扱うのが容易であり、高校の物理ではこれを使った問題によく出会ったものである。後にはさらに質量をも含めた等価性を説明する理論に出会ったりして、ともすれば我々は等価性の意味を過剰に評価してしまう傾向がある。一方の第2法則はエントロピー増大則と呼ばれ、こちらは数式にしたり問題を作ったりしにくいとか、或は第2だからあまり重要でないと思ってしまうためか、我々はつい忘れてしまうのだが、こちらが本書のテーマである。我々が今困っている問題は実は要するにエントロピー問題であり、例えば小手先のエネルギー技術では解決し得ないことは第2法則から明らかである、というのが本書の主張である。

さて、いよいよ我々は逃げられなくなってきた。ここであげた本のほとんどが、いわゆる科学技術による問題解決の限界を暗に([1][8][9]では明に)示しており、つまりそれは我々各個人の生活の変革(それも大幅な変革)の必要性を意味しているのである。人類が永続的に生き延びるためには、人類全体が毎日消費するエネルギー(食料も含めて)は、環境から永続的に取り出し得る量を越えてはいけないう、その排出物についても、環境が処理してくれる能力を越えてはいけないうというのが(考えてみれば当たり前の)結論である。各個人の正当な割当分は(権利の偏在を認めないとすれば)人類全体の割当分を全人口で割ったものにほかならない。我々、特に先進国国民は明らかにその権利を1桁も2桁も過大に行使している。

それでは我々はどのように行動すればいいか。入試科目名と宗教団体名以外では死語になっていと思われた「倫理」という言葉¹⁹)がここに復活しようとしている。

[10] 加藤尚武『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー '91

本書は昨年末に書店に並んだばかりのホカホカの

本で、書名通り、環境倫理学という学問の紹介を解かりやすく行なっている。環境倫理という言葉には書店ではそれまでお目にかからなかったため、こういう学問があることを私も知らなかった。そういう意味で、この本の存在自体が明るい材料である。本書では例えばATを批判していて、その議論が粗雑に感じられ、異議をはさみたくなる、といった瑕疵もあるにはあるが、それらを差し引いても十分有り難い本である。

但し、物事には順序がある。いきなり学問体系を突きつけられても有り難くもなんとも感じないのが普通である。本書の前に、本稿で紹介するような他の書物にあたっておいて、充分混乱して困った所で、よく整理された「学問」に出会う、これが本書の正しい利用法である。例えば本書で「自然の生存権の問題」を取り上げているが、私を含めてたぶん多くの人はそこまで考えたこともなかったろう(従ってこう書いても何のこともか解からないのだろうが) 予め[8]を読んでうーんと唸っておくとよく解る、少なくとも私の場合はそうだった。

倫理の問題は難しい。もう少し身近に引き寄せたものも読んでおきたい。そこで、特に、

[11] 杉田聡『人にとってクルマとは何か』大月書店 '91

をお薦めする。未だにクルマ或はクルマ社会を礼賛した脳天気な本が数多く出ているが(その方がビジネスになるのは分かるが)、本書は勿論その反対の立場の本で、クルマ社会とクルマに依存する我々の生活の道徳的問題を追及している。我々に具体的な問題を突き付けてくる、ある意味ではイヤな本であるが、無視して通る訳に行かない問題でもある。但し、経済的問題については明確に答えてくれている。日本の経済は実質的にクルマの製造・販売・消費に支えられているため、例えば国民全部がせーの一で一斉にクルマの使用を止めれば日本の経済的カストロフィーは必至であり、従って、それを食い止めるための努力を(12) カレル・ヴァン・ウォルフレン『日本/権力構造の謎』(上、下) 篠原勝訳、早川書房 '90で示されるような権力構造が全力で行なうだろうことも想像がつく。まさに「クルマは急に止(と/や)められない」なのである。

¹⁹ もう1つ政治倫理という言葉も残っているが、機能していないという点で死語に含めた。

さて、生活変革の必要性和倫理の重要性は分かったとして、さらに問題はその先にある。倫理で人は動かない。そこでまた話は技術に戻ってくる。今度は科学技術や工業技術の話ではない。心の持ち方の技術の話である。昔は宗教がこれを一手に引受けてくれたが、今後はどうなるのだろう。

[13] ツイアビ（話者）『パパラギ』岡崎昭男訳、立風書房 '81

から入ろう。ツイアビは南の島の酋長で、パパラギは彼らの言葉で白人を意味する。文明人の姿を外から描いてある本である。我々が当たり前だと思っていることが見方によってはいかに奇妙に映るかがわかる。とりあえずは、これを読んで文明に汚染された常識の垢を落とそう。そして次に、

[14] 高橋克彦（対談集）『1999年』小学館 '90

を紹介する。本稿のタイトルには最もマッチした本である。いわゆるニューエイジに属する本で、怪しげな人達がUFOだのノストラダムスだのといった怪しげな事を喋っている、怪しげな本である。が、私自身はこの本の内容は半分位は本当だろうと思っている。全然科学的でないと言われそうだが、自分（達）が解かっている事をひとまとめにしてバツサリと否定してしたり無視したりする方が実は余程科学的でない態度なのである。

たまたまこの分野は学問的に体系化されておらず、実験による検証が困難で、そのため売名等を目的とした嘘が混じりやすい、という問題を持っているにすぎない。来たるべきものがハルマゲドンでない、ということも証明されていないのである。

最後に、もう少しロマンチックな話として、

[15] ピーター・ラッセル『グローバル・プレイン』吉福伸逸ほか訳、工作舎 '85

もまた興味深い本である。[5] をさらに発展させ、地球規模の1つの知性の出現を予言している。人間がその構成要素であるが、それは歯車として働くのではない。また、その伝達系は電気通信ではなく、例えばESPのように、今のところ眠っている人間の潜在能力の何かだとしている。本書は、理解するのは容易だが、納得するためにはかなりの予備知識を必要とする。私自身は彼のシナリオを最も信じている。その理由は、...もう1回だけ使わせて頂こう。読めば解かる。

実はまだまだあるのだが、スペースも尽きてきたのでこれくらいで止めておこう。人類の未来は、恐ろしくもあり、楽しみでもあり。あなたはどうか感じたか、お聞かせ願いたいものである。

（ひらおか のぶゆき 講師）

（1992. 1. 17受理）